

# 一年生でも新聞が読める

## 革命的漢字教育法

石井 勲<sup>いししいさお</sup>先生のこと

私は文章を書くのが職業であったため、石井先生（東京都四谷第七小学校教諭）の優れた漢字教育の諸システムを、一般に紹介した人間という光栄を持つことになった。一昨年の春、朝日新聞に随筆を書く約束になっていた時、たまたま石井先生の授業を参観する機会があり、強い感銘を受けた。石井先生は、漢字の象形文字という性質を利用して、一年生に基本的な漢字を教えていた。先生が「電」という字を黒板に書き、『雷』からしつばの出たものなかに。」と児童に質問することにより、その意味を推測させ、おぼえさせていた。わたしは、先生の教え方の効力に驚き、その驚きを素直に語ったにすぎない。

今日では、全校石井先生のシステムを取っている学校もあるという。すぐれた業績が、いつまでもあらわれずにいることは、どうせできなかったのである。先生のシステムが、

本書のような学習的な本となって、一層知られることは、たいへんうれしい。(作家 大岡昇平)

### よい成績は石井方式で

評論家 福田恆在

日本人は概して保守的な民族なのですが、「ことば」の問題となると奇妙に進歩的になる。おそらく、だれもが、日本語に対して、多かれ少なかれ劣等感を抱いているからでせう。そのため、「大衆のため」「子どものため」と称しては、不合理な表記法改革をする。何のことはない、「子ども」「大衆」といふかくれみをつけた、劣等感の育成にすぎません。

こんなへっぴり腰の教育観で、子どもを教育してゐるのが現状です。最近、水道方式とか、プログラム学習とか、学習の能率化が、世の母親の間に大流行といふのも、こんなことが原因なのでせう。でも、私なら、さういふ学習方式以前の問題として、学習の基本となる国語教育に、効果が証明ずみの石井さんの漢字学習法をお勧めします。はるかにより成績がよくなるでせう。幸ひ、本書には、個々の漢字の教へ方まで、親切に書かれてをります。母親の最もよい手引きとなることは疑ひありません。(歴史的かなづかひによる)

漢字は必要です。

東京大学教授 文学博士 宇野精一

いわゆる進歩的国語政策論者の必死の策動にもかかわらず、世間から一向に漢字はくならない。一方、子どもの漢字力の低下を心配する声も決して衰えない。ということは、要するに、日本語を読み書きするには、どうしても漢字が必要だという何よりの証明である。必要なものなら、なるべく能率的に教えたいし、教える責任がある。石井さんの漢字教育方式は、こういう見地から考え出された。そして多くの実験を重ねた結果、今や全面的実施に移るべき時となった。しかもそれは一日でも早い方がよい。ただし、石井方式は、天動説の迷妄を打ち破った地動説のようなものであるから、従来、これに対していろいろな誤解や偏見も多かった。しかし、それらもすべて、本書によって解決されるであろう。

教師はもちろん、教育に関心のある親たるものは、ぜひとも熟読されるよう切望する。

### まえがき

いまの教育では「言」<sup>1</sup>という、こんなかんたんな字でも、四年生にならないと教えません。その結果はどうでしょうか。東京都の漢字指導の実験学校の発表によりますと、この「言」<sup>1</sup>という字が、六年生になっても四十六パーセントの子供には、読むことさえできなかつたということです。実に驚くべき事実ではありませんか。

わたしの学級では、一年生でも、この字を教えます。そして、ほとんど全員の子どもが、読んだり、書いたりしています。実験学校の六年生以上によくできます。しかし、学校で、

特別に漢字の勉強に、たくさんの時間を費やしているのではけっしてありません。では、どうして、一年生が六年生よりできるのでしょうか。

「宇宙」という字があります。学校では、この字を、中学生にならなければ教えません。ところが、習うはずもない小学校の一年生が、この字を平気で読んでいます。不思議に思って、どうして読めるのか尋ねてみますと、テレビ漫画に「宇宙船」というのがあって、毎日見ているので、ひとりで覚えてしまったというのです。

一年生でも、実際の生活では、このように実に多くの漢字を読んでいます。これらの漢字は、学校で教えなくても、ひとりで覚えられるほどですから、学校でもこれを使うようにすればよいのです。ちょっと注意して教えてやるなら、すばらしい効果が収められるはずです。「鉄は熱いうちに打て」といいます。熱いうちに打てば、かんたんに伸ばすことができませんが、冷えたら、どんなにたたいても、もう、どうにもなりません。漢字学習に関するかぎり、いまの教育は、冷めた鉄を打つおろかさを行なっています。効果のないのがあたりまえです。

こういうことも、それが漢字だけの問題で済むならば、ほっともおけましよう。しかし、漢字の力が弱かったら、どんな種類の本でも、まんぞくに読めないのですから、たいへんです。理科や社会科の学習でも、まんぞくにこれを進めることができません。算数だって、問題を解くことができません。

わたしが、高校の教師から小学校の教師となり、一年生に、文部省の目標の十倍の漢字を覚えさせる実験に成功するまでの十七年もの間、この道に努力してきたのは、それが、漢字だけの問題ではなく、あらゆる学問の根本だと考えたからです。

この四月から、私の方法を始めた学校が、全国のあちこちに現れています。それらは、いずれもわたしの予想にたがわず、すばらしい成績を上げています。この方法が、世に広

く採用される日も近いことと思われます。しかし、教育は一日も休みなく行われています。一日遅れれば、それだけ失うところも少なくありません。

わたしの方法は、だれでも、どこでも行なえて、いままでの十倍も成功する方法であることは、本書をお読みいただくなら、どなたにもきつとおわかりいただけると思ひます。一日も早く、ひとりでも多く、この方法をとられるよう祈るしだいです。

最後に、本書が刊行できますのは、講談社の山本康雄氏・渋谷裕久氏・牧野武朗氏・鈴木邦弥氏の諸氏のお力によるものであり、ここに厚く感謝申しあげたいと思ひます。

一九六二年冬

石井 勲